冬日の道

水上勉

中央公論社

冬日の道

©検印廃止
一九七〇

定価三九〇円

昭和四十五年三月十五日印刷
昭和四十五年三月二十五日発行

著者　水上勉
発行者　山越豊
印刷　三陽社
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

冬日の道　3

もう一つの旅　103

「夢見る部屋」の人　163

あとがき　182

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

冬日の道

一

京都の禅門立中学を出て、立命館大の文科にはいったけれど、すぐ退学し、渡満、闘病、二十一歳で上京するまでは、およそ文学仲間と縁がなくて、直木賞受賞の四十三歳まで、まったく単独旅行者といえた。編集者は、文壇へわらじ履きで登場してきた観があるから、そのわらじ履き修行の道程を書いてみないか、とおだてる。わらじ履きとは、三田派、早稲田派などというグループに属さなかったことをいうらしい。が、作家はだれも単独旅行であるにかわりなく、グループとは他者の区分けにすぎまい。わらじ履きも、げた履きもあったものでなく、素足のひとり歩きが、作家の真姿である。若狭の田舎から上京してきた、小説や芝居が好きだった貧乏青年が、才能もないのに文学にかぶれて、ときには途方に暮れ、ときには勇気をふるいおこして、三十年を生きた。その間に同人雑誌にもはいった。文学出版社にもつとめた。文壇関係に馴染みをつくることから、私は私なりの修行をしてきたといえるかもしれない。その途次、ゆきおうて世話になった人、仲良くなった人、けんか別れした人、今日もまだつきあっている人、交友録といった

ものも多少はなくはない。そのことならば、記憶のうせぬうちに書きとどめておかねばという気持もあって、求めに応じ、この文を草することにしたが、書き出してみて、存命の先輩、知友の名を、無断で登場させねばならないことに気づいて、多少のひっかかりを感じる。よけいなことを書きやがってと思われはしないか、気がかりである。小説ならともかく、この種の文章の掟として、さしさわりない程度に記しておかねばならぬ。

私は二十一歳で上京している。前年に徴兵検査をうけ、丙種となり、第二国民兵役に編入されたが、三年ごしの結核も快癒し、いつまでも田舎にぶらぶらしているわけにゆかなかったので、東京へゆこうと思いたった。もちろんあてがあったわけではない。当時小石川の教材社から「作品倶楽部」、厚生閣から「月刊文章」という地方青年向きの投書雑誌が出ていた。病気中にこれを愛読し、懸賞小説に応募したりしたが、めったに当選したことはなかった。因みに、「作品倶楽部」の選者は丸山義二、中本たか子の両氏、「月刊文章」は高見順氏だった。

「月刊文章」には一度小品が佳作にはいったが、高見順氏と丸山義二氏からは手紙をもらっている。この手紙は大切なものだったが、戦争のどさくさに紛失してしまって、残念でならない。丸山義二氏は当時農民文学懇話会に所属しておられ、「田舎」という作品で有馬賞（有馬頼寧農相が設けた農民文学賞）を獲得し「文藝春秋」や「文学界」に短篇を発表されていた。氏は郷里の兵庫県の龍野近在を描いた。若狭の訛と似たところがあり「朝明け」「部落」といった作品にと

りわけ感銘をうけた。

「作品倶楽部」に毎月投書していた縁から、氏は、当選作も書かない私に、手紙をくださったわけだが、たぶん私が手紙を書いたので、その返事だったかもしれない。文学をやるなら東京へ出て同人雑誌へはいったがよい、という忠告だった。いわば、この勇気づけが、私の無謀な上京の端緒になっている。

昭和十四年の二月十八日だった。そのころ父は本郷追分町にあった勝林寺の普請場にいた。妙心寺派の禅寺である。この寺が追分町から駒込の染井墓地近くに移築されることになり、若狭で大工をしていた父が、そこへ仕事にきていたのだ。この父の飯場をたよって私は上京している。

二

昭和十四年の一月は、陸軍の弾圧で、近衛内閣が総辞職した。平沼内閣が誕生して、日本軍は海南島を占領している。七月には国民徴用令が公布されて、もう、戦時色は濃く、国民精神発揚週間などといって、平沼首相が「臣民の道」を放送していた。二月十八日の朝、東京へつくと、本郷追分町の父の仕事場へいった。そこはカンナ屑のちらかった飯場で、昼は板けずり場なのを、夜は寝床にするといった掘立小屋だった。父の大工仲間が四、五人いたが、小屋の地べたに板を敷いただけの床で、一夜だけ泊まって、翌朝早く父に起こされ、ゆくあてもなく、四谷坂町行き

の市電に乗った。丸山義二氏のお宅を目ざしたのである。

四谷見附で降り、地図をたよりに新宿に向かって歩き、右に折れ、坂道をくだると四十四番地である。そこに丸山氏の家があった。路地へまがる角のあたりに、漢方薬の問屋があったのをおぼえている。ぶしつけな訪問だったが、丸山氏は会ってくださった。「生活のあてがないのなら、どこか働き場をみつけねばなりませんね」親切にいってくださって、自分の友人がいま日本農林新聞という業界紙にいる、そこへはいってみたらどうか。願ってもないことだった。丸山さんは、有楽町の工業日日新聞の校正室へ私をつれていってくださった。日本農林新聞の出張校正室である。丸山さんの友人が出てきた。細野孝二郎氏である。細野氏は、「文芸」に「黄色い死体」という短篇を発表しておられたので、若狭にいたときから名は知っていた。ロイドぶちの強度なめがねをかけた細野氏の、糸のような目をみて、私はほっとした。

氏は岐阜県根尾村の出身で、プロレタリア文学を志し、文壇に出て間なしに逮捕、転向といった苦渋の歳月をなめてきた人。浅黒い顔だが、目のやさしい人だった。折りよく欠員があるから、社長に頼んでみるといわれて、私はその日帰った。追分町の荷をリヤカーに積んで、早稲田の鶴巻町にあった岩梅館という下宿屋にはいった。新聞広告でいったのである。傾きかけたコの字なりの二階家の、北向四畳半を借り、二、三日後に細野氏から朗報をうけた。

日本農林新聞は九段の富士見町にあった。警察病院のわきをはいってすぐ左側である。モルタ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

ル二階建ての四角い家で、窓から警察病院の病室が、額をならべたようにみえた。患者がのぞいていたり、干し物がみえたりした。

新聞社は、農林といっても林業が主で、それは社長の平野増吉氏が、庄川事件で名を馳せた人であることからしてもわかる。氏は日本林業界の大物だった。二階が編集室で、十人ばかりの記者がいた。当時の編集長は、今日、岐阜県知事の平野三郎氏である。

細野氏は、デスクだった。新聞は週刊で、記者が書いた原稿を、細野氏が割りつけし、土曜日に有楽町の工日の印刷部へいって組み、日曜日に刷りあがったのを、記者たちが手にして、取材かたがた回り先へ配るという仕事である。主筆は木下青嶂氏。俳人で、今日も岐阜市に住んでおられる。私は、この木下氏に記事を書く作法を習った。神田橋にあった山林局、営林局、いまのパレスホテルのところにあった帝室林野局、東大農学部、赤坂にあった治山治水協会、などといった先が私の持ち場にきまり、朝からそれらをたずねて、ニュースをとり、四時に帰って記事にし、木下氏に提出する。文章といったものを職業として書いたのはこれがはじめてである。

上京して十日とたたぬうちに、私は、丸山、細野の両氏の暖かい世話により、暮らすメドがついた。

三

細野孝二郎氏は下落合に住んでいた。神楽坂を通って鶴巻町へ帰る私は、誘われてよく酒場へいった。とりわけ赤城神社の手前の銀行横の飯塚という呑み屋は印象がふかい。私はここで、武田麟太郎氏の風貌を遠望している。

細野氏は当時「槐」という同人雑誌に加わっていて、有楽町の出張校正室へはよく、同人の堀田昇一氏がみえていた。「石狩川」の本庄陸男、上野壮夫といった人たちの名も、細野氏からよくきいた。私は、それらの人に会える日を楽しみにしていたが、堀田氏と上野氏だけは何かの折り会えただけで、本庄氏には会えなかった。

私も同人雑誌に参加したかった。月に一度ぐらい、四谷坂町の丸山氏をたずね、近況報告などしていると、丸山氏から「審判」という早稲田系の同人雑誌へはいらないか、といわれ、高橋二郎を紹介された。高橋は高木喬というペンネームをもち、英文科の三年だった。大塚駅から向原の方へきた王子電車沿いの家をたずねて、同人に入れてもらった。この高橋は作州津山の産である。「城のある町」といった作品を発表していて、田舎町の女学生のことを淡彩にえがく才気にあふれていた。私よりは一つ下だったかと思う。「審判」の同人は、早稲田の仏文科や国文科を出た人が多くて、みな新聞社に勤めていた。因みに、思いうかぶ名をいえば、朝日新聞に田代喜

久雄（現編集局長）、毎日新聞に岡本博、渡辺俠、読売新聞に谷村錦一、東京新聞に中村義則といったためんめんである。しかし、この人たちは、社務で忙しいために、雑誌は高橋が一人で編集し、発行元も、高橋の住居になっていて、私は、この高橋の家へ通いつめて、編集を手つだった。巣鴨の駅近くにあった皎明社とかいう印刷屋へゆき、二、三号の雑誌を出したが、やがて町田実、岸田正、徳田修一が加わって「審判」は「東洋物語」と誌名を変えて出発することになった。この創刊号に私は「山雀の話」という八十枚の短篇を発表している。これが処女作である。丸山義二氏と細野孝二郎氏から過褒された。

合評会は上野の聚楽だった。その席上で、岡本博氏が私の作品を激賞した。若狭が舞台で、寒村の富豪の愛玩していた山雀がぬすまれて、駐在所の巡査が捜しまわる話を書いたのだ。細野氏の作品や、丸山氏の作品からの多少の影響があったものと思う。

私はその間に、岩梅館を出て、同じ鶴巻町ながら榎町に近いあぶらやという質屋の横にあった春秋荘へ越していた。大通りから専用道路をもつこのアパートは、当時としては、いい建て物で、別棟に、夫婦者の住む二間ないし三間つづきの住居もあった。ここに谷崎終平氏、半田義之氏がおられた。私は一業界紙にいたので面識はなかったが、食堂が別棟になっていたので、よく、ここへゆくと、ふたりに出会った。のちに、谷崎氏に会ってこのころの話をしたらなつかしがっておられた。半田氏は芥川賞を受賞されて間もないころで、もっとも、油の乗りきっておられた時

期である。

独身者の建て物の方に古谷綱武氏の弟だと自称する学生がいた。彼はよく私の部屋へはなしこみにきた。友としては、京都の中学で同級だった森島昭が早稲田の国文科にいたのでときどきたずねてくるぐらいだった。私は、この春秋荘に二年ほどいた。榎町から矢来へ出て、神楽坂をすぎて富士見町へ通うのが楽しかった。矢来にはわが若狭藩主酒井侯の邸宅がある。赤城神社から肴町へ降りると、神楽坂は老舗のならんだ花街だ。ときおり、縁日があり、人出のある宵など、月給袋を握りしめて、ハシゴ酒しながら、鶴巻町まで帰ったものだが、私は、そのころからよく呑むようになっている。細野氏とも、高橋、田代といった同人たちとも、よく呑み歩いた。だが、私だけはいつもぴいぴいしていて、給料日の翌日はカラケツといった生活だった。

四

一年ほどで、日本農林新聞を私は辞めた。のちに細野氏の話によると、この前後に詩人の関根弘さんがつとめたそうである。しかし、私は会えなかった。私が辞めた理由は営業関係の人と対立して居づらくなったらしいときいたが、この記憶ははっきりしない。

田代氏を通じて、三島正六氏とそのころ面識をもった。三島氏の家は当時、牛込の原町にあり、田代氏がそこに下宿していた縁だった。三島正六氏は当時報知新聞にいた。私は、三島氏に報知

新聞へ入れてもらった。校正部である。有楽町のいまの、そごうの建て物で、社長は三木武吉氏、編集局長は野沢秀信氏。校正部は二部制だった。私は小説や随筆係にまわされ、連載小説の尾崎士郎「青春紀聞」を毎日、楽しみながら校正している。

報知に変わると、東中野のガード近くの、柏木五丁目にあった寿荘という安アパートへ越した。春秋荘では炊事が出来ないうえに、有楽町へは不便だったので、省線の利用がいいと思って越したのだ。いまの日本閣のまうしろのあたりで、当時はまだ、柏木五丁目は閑静だった。戸山ヶ原には一戸も家がなく、陸軍技術研究所と、青物市場と、豊多摩病院の建て物が、晴れた空にくっきりつき出ていた。

報知新聞につとめるかたわら、高橋二郎と「東洋物語」を編集していたが、まもなく、資金難で、休刊の憂き目をみた。また、これと前後して報知新聞から学芸社という文芸書の出版社にとめを替えた。これも三島正六氏のすすめである。新聞社の校正係よりは、文芸書の出版に魅力があり、本造りをおぼえておくことも、私には必要だと思われた。

新橋の土橋ぎわにあった日吉ビルの三階で、広田義夫社長に会った。この人は改造社の出版部長をした人。三島正六氏は、この社の企画顧問だった。どういうわけか、社員は二人ぐらいしかいなくて、私は入社して早々に、作家まわりや、校正の仕事に追いまくられた。窪川稲子「夢多き誇」、高見順「遙かなる朝」、武田麟太郎「風の街」、南川潤「曲馬館」などといった本がすで

に出ていた。新企画は、片岡鉄兵氏の「夕月物語」。三島氏がすでに交渉しておいたのを、装丁や判型の相談、校正に出向けばよかった。はじめて片岡鉄兵氏に会ったときは、氏が、小柄で顔いろがわるかったのが印象的である、杉並区の清水町だったか。玄関での立ち話で、私の用向きは五分ほどで終わったが、若狭にいたころ、「生ける人形」を愛読していたので、この片岡氏に会えたことはうれしかった。「夕月物語」は、片岡氏が婦人雑誌や読み物雑誌に書かれた短篇を集めたもの。私にとってははじめての本造りであった。

広田義夫氏は、金繰りに忙しい人で、社にいる時間よりは出歩いている時間が多かった。この社へ、よく顔をみせた人に、昭森社の森谷均氏がいる。白髪のバルザックの肖像に似た風貌の氏はそのころもステッキをついていた。広田氏は、文芸書のほかに蒙露和大辞典を手がけていて、せまい編集室の隅に出来あがったのが山積みされていたが、印刷や紙代が滞って、困っていたようである。その資金を借りる先が「戸田先生」という五反田の金融業者であった。私は五反田の戸田家へはゆかなかったが、よく、目黒の駅前で、そこから帰る広田氏と待ちあわせて、手形の期日の迫った銀行へ車で走ったことをおぼえている。戸田先生、戸田先生と、広田氏が頼みの綱のようにして、電話をかけていた先は、実は、戸田城聖氏である。のちに創価学会の二代目会長となった人で、このことも、のちに現会長の池田大作氏にお会いした節にはなしたら、氏も学芸社の名はおぼえておられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.